

平成27年3月27日 (金)

1. ごあいさつ 総務幹事 北條洋 (福島県立医科大学会津医療センター)

2011年3月11日の未曾有の東日本大震災から4年が過ぎました。春になると当時のことが進行中の現実として甦ります。特に岩手、宮城、福島3県で津波災害、原発事故災害によりお亡くなりになられた方々、とりわけ未来が突然断ち切られた子供達のご冥福を心からお祈り申し上げます。また、ご遺族、今でも過酷で不安定な生活を強いられている被災者の皆様に謹んでお見舞い申し上げますとともに一日も早い復興、帰郷をお祈りいたします。

会津若松市街では側溝に春を告げる雪解け水音が聞こえる季節となりました。白鳥も診断室の窓越しに飛び北へ帰る準備をしているようです。しかし、油断は禁物です。一昨日、会津からの帰福路は地吹雪でした。皆様の地域ではどんな時春の訪れを感じるのでしょうか。

名古屋市で開催される第104回日本病理学会総会の1日目、4月30日(木) 18:40-20:10)には、「小児リンパ腫」をテーマに当研究会主催のコンパニオンミーティングが行われます。演者は鶴澤正仁先生と藤本純一郎先生で、新知見を加えそれぞれ臨床的、病理学的切り口で講演いただきます。会場は名古屋国際会議場 E会場 (レセプションホール 西) です。会員の皆様は勿論、リンパ腫に興味有る皆様にも是非お声掛けし、多数の参加をお願いします。

日本の小児腫瘍研究分野では新たな展開、発展を迎えようとしています。日本小児がん研究グループ (The Japan Children's Cancer Group, JCCG) の発足です。日本小児白血病リンパ腫研究グループ (JPLSG) と小児固形がん臨床試験共同機構の各研究グループ (日本ユースティング肉腫研究グループ (JESS)、日本神経芽腫研究グループ (JNBSG)、日本小児脳腫瘍コンソーシアム (JPBTC)、日本小児肝癌スタディグループ (JPLT)、日本横紋筋肉腫研究グループ (JRSG)、

日本ウィルムス腫瘍スタディグループ (JWiTS)) が一つの小児がん臨床研究組織となります。JCCG専門委員会には病理診断委員会が組織され、構成は小児腫瘍組織分類委員会の中央病理診断委員会が担う方向で調整が図られます。若手の先生方には中央病理診断委員会で積極的に活動し、成果を出していただくよう希望しています。日本小児病理研究会としても会員の皆様と情報を共有するため、分類委員会にお願いし教育講演を企画してはどうかと考えています。

最後にこどもを描いた好きな作品をご覧くださいと思います。1939年、内田巖の「子供の群」 F10 キャンバス・油彩画です。画集には「緑の野に群れ遊ぶ子供達、私が好んで描くテーマである」と書いています。あえて、表情を詳細に画くことを避けています。内田の実子が3人いますがわかりますでしょうか。楽しんでいただけると嬉しいです。



2. 第35回日本小児病理研究会学術集会のお知らせ 第1報

第35回日本小児病理研究会学術集会を下記の通り開催いたします。

日時：平成27年8月29日 (土) 9時30分から

場所：国立成育医療研究センター (教育研修室)

世話人：松岡健太郎 (国立成育医療研究センター病理診断部)

参加費：3000円

主題：エピゲノム異常と小児周産期疾患
教育講演：エピゲノム異常症 鏡雅代先生 (国立成育医療研究センター分子内分泌研究部)
シンポジウム：胚細胞腫瘍の臨床と病理

前日の8月28日 (金) には小児腫瘍症例検討会を開催します。

詳細は次号にてお知らせします。

3. 第104回日本病理学会学術集会コンパニオンミーティングのお知らせ

日時：平成27年4月30日（木）18時40分-20時10分
場所：名古屋国際会議場 E会場（レセプションホール
西1号館4階）

オーガナイザー；岸本宏志先生（埼玉県立小児医療センター病理診断科）

座長：中澤温子先生（国立成育医療研究センター病理診断部）

テーマ 小児リンパ腫の新しい分類と治療戦略

演題ならびに演者

CM-4-1

日本小児白血病・リンパ腫研究グループによる小児非ホジキンリンパ腫に対する臨床試験の治療成績
鶴澤正仁先生（あま市民病院 病院管理監・愛知医科大学先端医学研究センター）

CM-4-2

小児リンパ腫の病理診断

藤本純一郎先生（国立成育医療研究センター）

〈オーガナイザーのことば〉

白血病やリンパ腫等血液腫瘍の病理分類はWHO分類2001、WHO分類2008が病理所見に細胞マーカー、染色体及び遺伝子情報を加味した近代的な分類として広く受け入れられています。科学の急速な進展と同時進行する形で、わが国の小児血液腫瘍に関する臨床研究の枠組みも発展しました。すなわち、地区ごとに活動していた研究グループが日本小児白血病リンパ腫研究グループ（JPLSG）として全国統一し統一プロトコール試験の実施が可能となりました。当初から病理医が参

加し病理中央診断委員会を組織してリンパ腫の病理中央診断を導入し、診断の均一性、正確性を担保しました。この中で、成熟B細胞由来腫瘍に対するB-NHL03、リンパ芽球型リンパ腫に対するALB-NHL03/LLB-NHL03研究、未分化大細胞型リンパ腫に対するALCL99国際研究が実施され、最近、研究結果が続々と発表されています。今回は、上記の病理中央診断体制とそれに基づく臨床試験の成績について病理の立場、臨床の立場から報告していただきます。



名古屋国際会議場

4. 地区集会のお知らせ

第73回 関西小児病理研究会

平成27年6月6日（土）13時30分から

場所：

大阪市立総合医療センター（大会議室）

世話人：

大阪府立母子保健総合医療センター

竹内真先生

第131回 関東東海地区小児病理カンファレンス

平成27年7月4日（土）10時30分から

場所：

国立成育医療研究センター（教育研修室）

世話人：

国立成育医療研究センター病理診断部

中澤温子先生



成育医療研究センター教育研修棟

5. 幹事だより (2)

追悼 三杉和章先生、Wigglesworth先生

大阪府立母子保健総合医療センター 中山雅弘

幹事便りの2回目です。今回は、引退間近と言うことと指名されたと思います。私は卒業後の4年間で小児科医としての研修の後、1976年4月から1980年3月までの4年間神奈川県立こども医療センターの病理科にお世話になりました。三杉和章先生は4月1日付けでこども医療から横浜市大の教授とされました。せっかく、先生をたよってこども医療に応募したのにも思ったものです。結果的には、この4年間、こども医療と横浜市大の両方で先生の教えを受けることになりました。先生は、1956年にインターン終了後、オハイオ州コロンバスでレジデントをされ、帰国後、1958年に小児科に入局されています。1963年に永住の決意で再渡米され、コロンバスで研究生活のところ、1970年のこども医療設立の時に横浜に戻ってこられました。当時のこども医療は、大学の紛争を避けて病院で医療に携わる優秀な医師が数多くおられました。外科部長の角田昭夫先生は、「腸回転異常症の形成など日本できちんとわかっている病理医は三杉君だけだね」と言われていたのを思い出します。私の病理医としての最初をこども医療センターで過ごせたことは大変光栄なことでした。先生は、電子顕微鏡を利用した、小児特有の腫瘍、特に肝芽腫の研究でよく知られていますが、アメリカでの研究は、特発性新生児低血糖症の内分泌細胞が中心でした。私もこども医療で、難治性低血糖症の症例に多く遭遇し、胎児の内分泌細胞の発達など興味を持って仕事をしていました。病理学会での最初の発表は、肝芽腫の電顕所見でした。あるとき、突然死をテーマにした横浜市の公募研究に応募しませんかと言われ、当時のこども医療の剖検例を突然死の観点から再検討し、初めて英文で報告しました。検討症例の中にSIDSをほとんど認めなかったことに対する疑問が、その後の大阪でのSIDS研究へいたる大事なきっかけとなっています。こども医療生活のおわり頃に、大阪の病院の2カ所から就職のオファーをいただきました。大阪府立母子保健総合医療センターと小児保健センターでした。周産期中心の病院か？神奈川こどもによく似た小児病院か？と判断を決めかねて先生に相談しますと、間髪を入れず、あなたは母子センターに行きなさいと言われました。母子センターの開所まで、数年あり、その間の1年間、ロンドン大学の卒後研修病院であるHammersmith病院のJonathan S Wigglesworth先生のところでお世話になりました。周産期の剖検テクニックや考え方、胎盤病理の基礎などを教えていただきました。ある日、通常の胎盤検査の時に依頼書が付いておらず、胎盤だけで検査したとき、先生は、「Masa、この例は妊娠30週前後の早産で、SFDおそらく妊娠中毒症合併だろう」といわれ、鼻をヒクヒクさせました(先生の得意の表情です)。そのときは、魔術のように思ったものです。私は、4年間の小児病院での病理経験があるとは言え、その間に胎盤の検査を行ったのはわずか5例程度でした。Wigglesworth先生は、当時 Perinatal pathologyの教科書を執筆中で、作成した1章ごとにドラフトを見せてもらいました。当時、先生は、肺低形成に没頭という状態で、すべての剖検例で肺の形成と関連づけて熱弁されていたのを思い出します。週のうち1日は実験日で、その日は、ルーチン病理業務はせず、朝からウサギの実験です。胎仔の脳幹部を破壊し、呼吸運動抑制により生じる肺低形成の研究でした。帰国後もこのように研究日を作りたいとも思っていました。多忙と資質のなさでこのような生活パターンはできませんでした。専門家がいるとなぜか患者さんが集まるというか、その年に担当させてもらった解剖は20例程度でしたが、半分近くは肺低形成症例だったように思います。肺の組織で、radial alveolar countを計測し、肺低形成の中に肺の未熟性を持つ例と、肺は週数相当に発育しているものがあることを確信しました。帰国後、第1回小児病理研究会のシンポジウムで発表しました。先生は、1960年頃のロンドン大学卒業で、最初の数年間は、胎盤の血管系の発達などを研究されていたそうです。その後、1970年頃から新生児の頭蓋内出血などの研究に従事され、臨床医のKaren Papeと共同で、有名な Hemorrhage, ischemia and the perinatal brainを1979年に出版されています。その後の研究テーマは肺低形成中心で、前述のPerinatal Pathologyの教科書は、1984年に出されています。このように5年から10年を区切りとして、ひとつの研究テーマを突き詰めるということも教えていただいたことでした。

私にとって、師と仰ぐお二人の先生が昨年お亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします。

事務局より

本年度は幹事選挙の年です。次号にて選挙用紙を配布いたしますので、投票をお願いいたします。

日本小児病理研究会会報65号
平成27年3月27日発行
編集・発行 松岡健太郎
日本小児病理研究会事務局
<http://jspp.info/>
〒157-8535
東京都世田谷区大蔵2-10-1
国立成育医療研究センター

病理診断部病理診断科
TEL (03)3416-0181
FAX (03)5727-2879
E-mail
matsuoka-k@ncchd.go.jp